

タイ語学習の対学生魅力： タイ語履修生へのアンケート調査から

加 納 寛

目次

はじめに

- 1, タイ語学習の今日的意義
- 2, 第1期生外国語選択前アンケートにみるタイ語学習の魅力
- 3, 第1期生からみたタイ語学習の魅力
- 4, 第2期生からみたタイ語学習の魅力

結 び

要 旨

愛知大学国際コミュニケーション学部比較文化学科では、1998年度よりタイ語を選択必修外国語として履修できるようになった。現状では、タイ語を学習できる大学はかなり限定されており、タイ語履修はある程度特殊な選択であるといえる。

本稿では、愛知大学においてタイ語を選択外国語として選択する学生が、タイ語のどの部分に魅力を感じ、なぜ、どのようにタイ語を選択したのかについて、アンケート調査により観察した。

その結果、ほとんどの学生は、タイ語を選択することによって、「タイ文化」に対する理解を深めることや、タイ語を「観光」・「旅行」に利用することを期待していることがわかった。一方、日本企業のタイ進出が著しい昨今の状況にもかかわらず、タイ語学習の実業的利点にはほとんど関心が向けられていないことがわかった。

今後は、「文化」的側面のみにとどまらず、政治や経済、社会情勢をも踏まえた総合的なタイ理解を、より積極的に、より幅広く訴えていくこ

とが、日タイのよりよい相互理解には不可欠であると考えられる。

キーワード：タイ語、選択外国語、履修選択、アンケート調査

はじめに

愛知大学国際コミュニケーション学部比較文化学科では、1998年度の設置時よりタイ語¹を選択必修外国語として履修できるようになっている。タイ語のほかには、中国語、ドイツ語、フランス語、韓国・朝鮮語が履修可能である。学生は、1年次の春学期中に選択必修外国語を決定し、1年次秋学期から当該外国語の学習を開始する。卒業には選択必修外国語8単位が必要になる。

選択必修外国語科目のうちタイ語は、愛知大学において1998年にはじめて設置されたものである。したがって他の言語科目に比べて未だその体制は微弱である。タイ語科目の担当教員は、愛知大学全体で専任教員1名と非常勤教員1名である²。そのため、現在のところ「比較文化学科」学生以外は、タイ語を選択必修外国語として履修することができない³。現在、タイの大学との協力体制の整備⁴やタイ語教材の充実⁵等をとおして、諸条件の改善にむけて鋭意努力がなされている。

日本全国を見ても、日タイ間の非常に幅広い関係の割には、タイ語を学習できる大学は他外国語に比べてかなり限定されている⁶。現在の日本人の関心をかなり反映するであろうインターネットのホームページを見てみると、「大学」および「タイ語」という2つのキーワードによるand検索では78件が該当した⁷。同様に愛知大学国際コミュニケーション学部において履修可能な他の外国語を検索してみると、英語991件、ドイツ語702件、中国語637件、フランス語541件、韓国語220件であった⁸。これは、大学におけるタイ語への関心が、上記の他外国語に比べて格段に少ないことを意味する。タイ語を専門的に学習できる東京外国語大学に例をとると、1学年の募集人員715名に対してタイ語は15名、タイ語に近いラオス語は10名の募集であり、タイ語およびラオス語の履修者は全体の3.5パーセントにすぎない⁹。こうした点からみれば、タイ語を大学において学習するという事は、かなり特殊な選択であるといえる。愛知大学の学生にとっても、「タイ語」が選択外国語の中でもっとも「馴染みの薄い」言語であることが想定される¹⁰。

では、愛知大学においてタイ語を選択外国語として選択する学生は、タイ語のいったいどのような点に魅力を感じ、どのような理由からタイ語学習を希望したのであろうか。本稿では、学生への3種類のアンケート調査により、学生がタイ語履修に対して感じた魅力、すなわちタイ語を選択必修外国語として希望した理由について観察していくことにした

い。

3種類のアンケート調査は、1998年度入学の第1期生に対するもの2種と、1999年度入学の第2期生に対するもの1種からなる。第1期生に対する調査としては、選択必修外国語を学生が決定する前に実施したタイ語宣伝企画においてタイ語に興味を持つ参加者に対して行ったものと、選択外国語決定後にタイ語履修者に対して行ったものがある。第2期生に対する調査は、選択外国語決定後にタイ語履修者に対して行ったものである。

以下、まず大学においてタイ語を学習する今日的意義について概観した後、第2に第1期生に対する選択外国語決定前のアンケート結果分析を、第3に第1期生タイ語履修決定者に対するアンケート結果分析を、第4に第2期生タイ語履修決定者に対するアンケート結果分析を、順に行いながら、学生がタイ語のどの部分に魅力を感じ、なぜ、どのようにタイ語を選択したのかについて観察していきたい。

1、タイ語学習の今日的意義

まず、大学においてタイ語を学ぶことに、一般にどのような意味があると考えられるのかを概観しておきたい。

第一に、大学に特徴的である「研究」および「研究指導」の観点から、タイ語学習に関する研究上の利点を挙げておきたい。国際コミュニケーション学部では「卒業研究」が必修になっており、学生は卒業に際して国際コミュニケーションに関する「研究」を実施する必要がある。したがって、研究上の利点は、卒業までにたいへん重要な意味を持つ。また、大学院に進学する学生にとっては、将来研究を続行していく際に、どのような外国語を利用することができるかによってその活動の幅も変わっていくことが考えられるため、選択外国語についての研究上の利点は重要である。

研究の場としてのタイは、比較的調査・研究上の制限も少なく、また治安もよいことから、割合に研究しやすい地域であるといえる。卒業研究の段階から、現地調査を実施することも十分可能である。国立図書館や諸大学の図書館の門戸も広く開かれている。日本からの距離もそれほど遠くはなく、物価も比較的安いため、学部生が研究のために渡タイし、1~2ヶ月間滞在したとしても、経済的な負担は重くはない。もちろん、タイについて本格的に研究を進めていくためには、「タイ語」の学習は必須条件であることは言うまでもない。

また、多くの卒業生が、卒業後すぐに就職する希望をもつことから、実業上の利点、将来の各職業における活躍に対する利点も学生にとっては重要なはずである。卒業後に就職を希望する業種にもよるが、企業もしくは官公庁に就職を求めるものが多いと思われるた

め、とくに経済的・政治的な利点が注目される。

日本とタイとの経済的・政治的な関係は、かなり深い。とくに1980年代後半以降の日本企業のタイ進出は著しい。1990年には在留邦人数は2万人を超え、バンコク日本人商工会議所の会員数は「世界最大規模の1160社に達している」という¹¹。大企業のみならず、多数の中小企業がタイに進出しており、企業に就職するならばいつタイに派遣されても不思議ではないという状況が生じていることがわかる。

また官公庁においても、タイ語が必要とされる部門は少なからず存在する。外務省では毎年、タイ語専攻者を含む「外務省専門職員」を採用している¹²。また、日本国内にも多くのタイ人が滞在していることから、入国管理局や税関、警察、地方自治体などでもタイ語への対応が必要とされているようである。

こうした意味で、大学において本格的なタイ語教育を受けることは、タイの研究を志す学生にはもちろん、企業等での国際的な活躍をめざす学生にとっても、実に有意義なことであるといえよう。習得した「タイ語」は、タイの人々とコミュニケーションをとるために不可欠な道具になり、将来タイを舞台に学術や経済などの分野で国際的に活躍する基礎になっていくだろう。とくに、このような日本とタイとの深い関係にもかかわらず、「タイ語」を大学教育の中で本格的に学んだ日本人はそれほど多くないことから、「タイ語」を習得することが、人生のさらなる飛躍につながる可能性も高いと思われる。

2. 第1期生外国語選択前アンケートにみるタイ語学習の魅力

タイ語に対する学生の理解・関心は一般に高くないことが予想されたため、第1期生に対しては、選択外国語の履修希望調査実施前に、タイ語宣伝企画「タイする午後」を実施した。この企画は、学生に対してタイ語を学習する意味・目標を提示し、またタイ語に親しみを持たせることにより、タイ語履修希望者を増加させることを目的とした。そのため、タイ語履修のメリットやタイ語の特徴についての説明、および簡易会話講座からなる約1時間の第1部と、タイ映画上映会の第2部から構成される約4時間の企画を、1998年6月18日の午後に実施した。

この企画への参加者は、第1部に26名、第2部に6名であった。参加者の中には、タイ語を実際に履修した学生も、実際には履修を希望しなかった学生も含まれる。また、本来は選択必修外国語としてタイ語を履修する資格のない言語コミュニケーション学科生2名や経済学部生2名も含まれている。その点で、タイ語履修者のみを対象とした調査に比べてより広範なタイ語認識が観察し得るとと思われる。

以下、アンケートの集計結果をもとにして、タイ語学習希望理由の観察を行いたい。ア

タイ語学習の対学生魅力：タイ語履修生へのアンケート調査から

アンケート用紙は、第1部の終了後に配布し、その場で回収した¹³。21通の回答があった。そのうち、17通が比較文化学科第1期生の回答、2通が国際コミュニケーション学部言語文化学科第1期生の回答、2通が経済学部学生（3年生1名、2年生1名）の回答であった。

参加者の「タイへの関心」についての設問では（表1参照）、「文化」への関心を挙げた者が21名中19名（90.5%）と多数を占めた。その他、「言語」への関心を挙げた者が7名（33.3%）であった。言語コミュニケーション学科の学生は、2名とも「文化」、「言語」への関心を挙げており、「言語」への関心の深さを示している。「ビジネス」への関心は1名（4.8%）、また「旅行」についての関心も1名（4.8%）であった。「ビジネス」への関心を挙げた学生は、比較文化学科生であり、経済学部の学生2名の回答は「文化」に対する者1名、「旅行」に対する者1名であった。

表1 外国語選択前の「タイへの関心」(%)

	文 化	言 語	旅 行	ビジネス	料 理
全体	90.5	33.3	4.8	4.8	4.8
(比較文化)	94.1	29.4	0.0	5.9	5.9
(言語コミュ)	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0
(経済)	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0

* 複数回答可

また、「タイ語学習に期待する利点」についての設問では（表2参照）、「タイの社会や文化への理解を深める」とする回答が21名中14名（66.7%）と多かった。「旅行」に役立てるとする回答は10名（47.6%）であり、タイ観光に魅力を感じているものが多いことがわかった。また言語的な興味自体をタイ語学習の目的として挙げたものは4名（16.7%）、「就職」に役立てたいとするものは1名（4.8%）に過ぎなかった。経済学部生2名の回答に着目すると、2名とも「旅行」に役立てたいとしており、1名は「タイの社会や文化への理解を深める」ことも挙げていた。このように、経済を専門的に学ぶ学生であっても、タイへの関心は経済やビジネスよりはむしろ文化的、観光的なものに偏ることが観察された。ここから、こうした「文化」理解や「旅行」に対する関心の深さは、比較文化学科生に特有のものではないことがわかった。

表2 外国語選択前の「タイ語学習に期待する利点」(%)

	文化・社会	言 語	簡 単	旅 行	就 職
全体	66.7	14.3	14.3	47.6	4.8
(比較文化)	64.7	5.9	11.8	41.2	5.9
(言語コミュ)	100.0	100.0	50.0	50.0	0.0
(経済)	50.0	0.0	0.0	100.0	0.0

* 複数回答可

全体として、タイへの興味は文化的なものに偏りが見られ、政治・経済等の社会科学的な

見地からタイに興味を持つ者は少数であることが明らかになった。実業における日タイ関係の深さは学生レベルには余り知られておらず、テレビの観光・クイズ番組等で喧伝されるタイの「エキゾチックな」イメージが強いことが、企画終了後の学生からの聴き取り調査によって確認できた。

タイ語を学習したいという参加者は21名中20名(95.2%)と多かったが¹⁴、実際にタイ語履修を第1希望として挙げた学生は有資格者17名中10名(58.8%)に留まった。前項と併せて考えれば、タイ語は、実業方面には利益の薄い「趣味的」な言語として学生に認識されており、専門的にタイ語を学習することへの躊躇が感じられる。学生からの聴き取り調査によれば、本人はタイ語履修を希望したものの、その両親がタイ語履修に対して強く反対したという事例も見られた。この場合の両親の危惧は、タイ語を学習することによって将来の就職に悪影響が出ることを懸念することから生じたものであるという。前項で概観した「タイ語学習の今日的意義」からみれば筆者にとっては心外であるが、こうしたタイ語認識はかなりの日本人に共通する見方あるいは偏見であると推察される。また、ドイツ語やフランス語なら「カッコいい」が、アジアの言語は「カッコ悪い」という学生の意見も存在する。アジアに対する認識が高まっている一方で、一般にはこうした欧米志向アジア軽視が未だに根強く残存していることも忘れてはなるまい。一方、タイ語履修を希望する学生は、タイに対する強い「文化」的憧憬をもっており、真摯にタイ語を学習したいという意気込みが感じられた。

3. 第1期生からみたタイ語学習の魅力

まず選択外国語履修希望調査における昼間主コース学生全体の希望動向を見ておきたい。もっとも希望者が多かったのは中国語の28名であり、次いでフランス語23名、ドイツ語20名、韓国・朝鮮語とタイ語はともに12名で同数であった。タイ語を第1志望にした者12名に対して、第2志望にした者は12名である。タイ語を第1志望、第2志望にした者の多くは韓国・朝鮮語もしくは中国語を併願しており、選択言語の希望においてアジア言語を選ぶ者は他のアジア言語と併願していることが読み取れる。希望の初期段階でアジア言語希望者とヨーロッパ言語希望者とに大きく別れることがわかる。

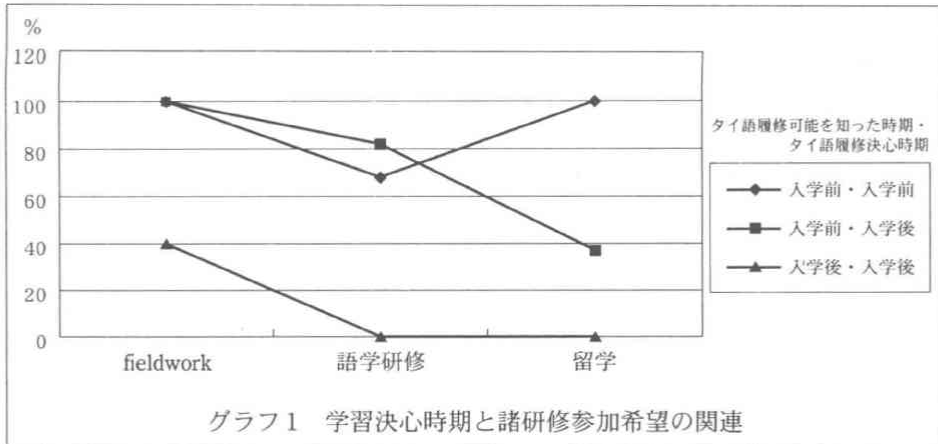
第1期生のうち、タイ語履修を登録した学生は15名であった。うち昼間主コース在籍者は12名、夜間主コース在籍者は3名である。タイ語の授業は、他の選択必修外国語科目と異なり夜間主時間帯には実施していないため、昼間に定職に従事している学生のほとんどは実質上履修が不可能である。そのために夜間主コース在籍者のタイ語選択者が少数にとどまっていると考えられる。昼間主コース学生で選択外国語を選択しなければならない学

生は、履修希望調査時において95名であった¹⁵。ゆえに昼間主コース学生のうちタイ語を選択外国語として選択した学生は12.6%である。冒頭で例に挙げた東京外国語大学の事例を考えれば、決して少ない率とはいえない。

さて、以下、タイ語履修者へのアンケート調査¹⁶の結果を観察していく。タイ語履修者は、履修登録後に退学者が出たため、昼間主コース生12名、夜間主コース生2名の計14名であった。

まずはタイ語学習を希望し始めた時期を見ていきたい。愛知大学においてタイ語の履修が可能であることを知った時期を見てみると、入学前に知っていた者が9名(64.3%)、入学後に知った者が5名(35.7%)であった。入学前にタイ語履修が可能であることを知っていた者が多いことがわかる。これに対して、タイ語を学習することを決心した時期を見てみると、入学前にタイ語履修が可能であることを知っていた9名のうち、すでに入学前にタイ語学習を決心していた者は3名(33.3%)であった。多くは入学後にタイ語学習を決心していることがわかるが、同時に33.3%もの学生が入学前からタイ語学習を志しており、タイ語科目の設置が高校生・予備校生にもある程度の魅力となっていることがうかがえる。とりわけタイ語を第2外国語として学習できる大学がそれほど多くないことから、タイ語科目の設置は愛知大学の個性的魅力化にも貢献しているといえる。

こうした学習決心時期と、学習参加への熱意との関連を見てみよう。学習参加への熱意は、タイ語関係の諸研修への参加希望率によって表示することができる¹⁷。よってここでは、2週間程度のタイ国内における「フィールドワーク」への参加¹⁸、4週間程度のタイ国内での「語学研修」への参加¹⁹、1年間のタイ国への交換留学への参加といった3項目について、入学前にタイ語学習を決心した者、入学前にタイ語履修が可能であることを知っていながら入学後に学習の決心をした者、入学後にタイ語履修が可能であることを知った者の3類型に分類して観察する(グラフ1参照)。入学前にタイ語学習を決心した者は、全員が「フィールドワーク」および「留学」に参加を希望しており、高いタイ語学習意欲を持つと判断される。とくに、1年間の「留学」を希望していることから、本格的にタイ語運用能力を身につけようとする意志がうかがえる。入学前にタイ語履修が可能であることを知っていながら入学後に学習決心した者では、短期間の「フィールドワーク」、「語学研修」への参加については積極的であるものの、長期の「留学」に対してはかなり消極的である。入学後にタイ語履修が可能であることを知った者でタイ語を履修した者は、諸研修への参加希望率は低い。学習決心時期が早い者ほど学習参加への熱意が高いことがわかる。



次に、タイ語履修希望の理由について観察していきたい。この希望理由については、「タイへの関心」と「タイ語学習に期待する利点」という2つの質問項目への回答を通して見ていくことができよう。ともに複数回答を可とする質問である。「タイへの関心」については(表3参照)、14名中13名(92.9%)までが「文化」への関心を挙げており、もっとも多かった。そのほか、「言語」そのものへの興味を挙げた者は3名(21.4%)であった。多くの学生の将来の就職と密接に結びつくであろうと思われた「ビジネス」への関心を示したものは1名(7.1%)に過ぎなかった。また、「タイ語学習に期待する利点」についての質問では(表4参照)、タイ語学習を通じてタイの「文化・社会」を理解したいとする者が14名中9名(64.3%)でもっとも多かった。これは、タイへの関心の多くが「文化」に向けられていることと軌を同じくしている。それ以外ではタイへの「旅行」に役立てたいとするものが5名(35.7%)と多かった。「就職」に役立つことを期待している者は1名(7.1%)に過ぎなかった。そのほか、質問者が設定した選択肢にはなかったものの、「珍しい言語だったから」、「滅多にない機会だから」履修を希望したという、タイ語を学習することの稀少性に着目した回答が4名(28.6%)であった。

表3 「タイへの関心」(%)

	文 化	言 語	旅 行	ビジネス
1期生	92.9	21.4	0.0	7.1
2期生	85.7	71.4	28.6	28.6

* 複数回答可

表4 「タイ語学習に期待する利点」(%)

	文化・社会	言 語	旅 行	就 職
1期生	64.3	7.1	35.7	7.1
2期生	85.7	14.3	57.1	14.3

* 複数回答可

このように見てみると、愛知大学国際コミュニケーション学部においてタイ語学習を希望する者の多くが、タイ語の習得を通じて「タイ文化」に触れることを目的としていることがわかる。彼らが「比較文化学科」の学生であることを考えるならば、「文化」への関心が高いことも納得できる。この「文化」への関心の高さが「比較文化学科」特有の現象であるのか、あるいはタイ語学習者一般にそうした傾向があるのかについては、今後の研究に待たなければならない²⁰。しかし、今回の被調査者が「比較文化学科」の学生であることを考慮に入れてもなお、当該学科には「国際ビジネス」関連講座が充実していることや、また昨今の「就職氷河期」という状況に照らして考えるならば、大学における選択必修外国語としてのタイ語履修者の中で、タイ語を通して「ビジネス」や「就職」に可能性を求める姿勢が希薄であることは注目に値する。

4. 第2期生からみたタイ語学習の魅力

まず選択外国語履修希望調査における昼間主コース学生全体の希望動向を見ておきたい。もっとも希望者が多かったのは中国語の31名であり、次いでフランス語14名、韓国・朝鮮語11名、タイ語7名、ドイツ語5名であった²¹。タイ語を第1志望にした者7名に対して、第2志望にした者は6名である。タイ語を第1志望にした者のうち2名は、タイ語を専願にしている。韓国・朝鮮語を第2志望にした者が3名、中国語、ドイツ語を第2志望にした者が各1名である。また、タイ語を第2志望にした者のうち4名は韓国・朝鮮語を第1志望に、2名はフランス語を第1志望にしている。第1期生と同様に、アジア言語を志望する者の多くは、他のアジア言語を併願していることが読み取れる。

第2期生のうち、タイ語を履修した学生は7名であった。他に言語コミュニケーション学科生1名が選択科目としてタイ語を履修した。ただし2期生では、夜間主コース在籍者のタイ語履修は見られなかった。昼間主コース学生で選択外国語を選択しなければならない学生は、履修希望調査時において71名であった。ゆえに昼間主コース学生のうちタイ語を選択外国語として選択した学生は9.9%である。1期生より若干下がったとはいえ、それほど大きな変化とはいえない。

さて、以下、タイ語履修者へのアンケート調査²²の結果を観察していく。

まずはタイ語学習を希望し始めた時期を見ていきたい。愛知大学においてタイ語の履修が可能であることを知った時期を見てみると、入学前に知っていた者が4名(57.1%)、入学後に知った者が3名(42.9%)であった。入学前にタイ語履修が可能であることを知っていた者の方が多く、第1期生と比較すると若干少なくなっている。タイ語を学習することを決心した時期を見てみると、入学前にタイ語履修が可能であることを知っていた4名

のうち、すでに入学前にタイ語学習を決心していた者は2名(50.0%)であった。第1期生より高い率の学生が、入学前からタイ語学習を志していることがわかる。すなわち、タイ語を学びたいと思う高校生や予備校生が、タイ語を学習できる大学として愛知大学を選択するという方向性がうかがえる。こうした学生は、「フィールドワーク」や「留学」といったタイ語関連の企画への参加希望率も高いことから、愛知大学とタイとの今後のより活発な交流が期待できる。

次に、タイ語履修希望の魅力・理由についての回答について観察していきたい。この希望理由については、第1期生に対するアンケート調査と同様に、「タイへの関心」と、「タイ語学習に期待する利点」との、2つの質問項目を通して見ていくことができる。どちらの項目も、複数回答を可とした。「タイへの関心」については(表3参照)、第1期生と同様に、「文化」への関心を挙げた者が7名中6名(85.7%)で、もっとも多かった。そのほか、「言語」そのものへの興味を挙げた者は5名(71.4%)であり、第1期生より言語そのものへの関心が増加していることがうかがえる。「ビジネス」への関心を示したのも2名(28.6%)となり、第1期生に比べて増加した。そのほか、「観光」を挙げたものが2名(28.6%)であった。また、「タイ語学習に期待する利点」についての質問では(表4参照)、タイ語学習を通じてタイの「文化・社会」を理解したいとする者が7名中6名(85.7%)でもっとも多かった。これは、第1期生と同様に、タイへの関心の多くが「文化」に向けられていることを示す。それ以外ではタイへの「旅行」に役立てたいとするものが4名(57.1%)であった。「就職」に役立つことを期待している者は1名(14.3%)であった。第1期生に目立った、タイ語を学習することの稀少性に着目した回答は、第2期生には見られなかった。

第2期生の回答を第1期生のそれと比較してみると、一致している点は、「文化」への関心の高さである。一方、大きく変化しているのは、タイ語の稀少性への着目、すなわちタイ語を珍しいものと捉える見方が、著しい減少している点である。これは、入学前からタイ語学習を志向する学生率の増加とも関連するかもしれない。また、ビジネス・就職に対する関心からのタイ語選択の若干の増加も、第2期生の特徴といえよう。ただしサンプル数自体が小さいため、これらの変化を断定的に示すことはできない。今後の動向に注目したい。

結 び

以上、愛知大学においてタイ語を選択外国語として選択する学生が、タイ語のどのような点に魅力を感じ、どのような理由からタイ語学習を希望したのかについて、主に3種類のアンケート調査を通じて観察してきた。以下、観察の結果をまとめておきたい。

愛知大学国際コミュニケーション学部では、第1期生も第2期生も、選択必修外国語の中でほぼ10%の学生がタイ語を選択している。この中には、入学前からタイ語を履修することを志して愛知大学に入学してきた者もあり、こうした学生のタイ語学習に対する熱意は高い。

ほとんどの学生は、タイ語を選択することによって、「タイ文化」に対する理解を深めることや、タイ語を「観光」・「旅行」に利用することを期待している。タイ語学習の魅力は、学生にとっては主に「文化的な」側面に限定されがちであることが浮かび上がった。

一方、日本とタイとの経済的・政治的な関係の深さから生じるタイ語学習の実業的利点については、学生にほとんど認識されることはなかった。とくに日本企業のタイ進出は著しい昨今の状況にもかかわらず、言語選択時においては学生の関心はこうした側面にはほとんど向いていないことがわかった。ビジネス上の利点に着目してタイ語を学習する者は、若干増加傾向が見られるものの、なお少数にとどまっている。逆に、タイ語を選択することが将来の就職に不利になるというような観測が、学生自身やその家族に持たれている場合すらあることもわかった。

こうした結果が出たことは、学生やその家族の一般的なタイへの認識が、「文化」的なイメージ²³や「観光」といった一局面のみに限定されていることを意味している。筆者は、タイについての大学教育の一端に連なる者として、政治や経済、社会情勢も踏まえた総合的なタイ理解をより積極的により幅広く訴えかけていく必要性を痛感している。「タイ語」を習得した学生たちが、タイと日本を舞台にさまざまな分野で国際的に活躍し、日タイのよりよい相互理解を促進していくことが望まれる。

以上アンケートを通じて、学生がタイ語学習のこういった部分に魅力を感じてタイ語を履修するかについて観察してきた。今後は、多種多様なタイ語学習機関におけるより広範な調査を通じて、日本人がタイ語学習に何を求めているのかを観察していきたい。また、こうした観察を長期間にわたって積み重ねることにより、日本人の思考におけるタイ語学習の魅力の変遷について考えていきたい。

注

1 「タイ語」とは、タイ中央部の言語を基礎に形成された、タイ王国の国語である。タイ王国は、東南アジア大陸部の中央に位置し、人口約6千万人を擁する立憲君主国である。タイ語は、音韻面から見ると中国語のような単音節的声調言語の特徴をもつ。文法面では孤立語であり、文字はインドの影響を受けたクメール文字を改良した表音文字である。

- 2 1998年の設置当初は専任教員1名、非常勤教員2名の体制でタイ語科目を担当したが、1999年度以降、諸般の事情から専任教員、非常勤教員、各1名の体制になった。
- 3 他学科の学生の履修は、「選択科目」として可能である。
- 4 愛知大学では、タイのナレースワン大学との協力体制を整備している。現在までに3つの協定が結ばれ、1999年度に始まった愛知大学の授業の一環としての「フィールドワーク」への協力や2001年度から開始される学生交換などを通じて、より一層の友好関係を深めている。
- 5 「外国語自習室」には、タイ語の学習参考書・カセット・テープをはじめ、タイの小学校教科書やタイ映画のビデオ・テープなどが用意されている。また、図書館には若干のタイ語書籍のほか『タイラット』などのタイ語日刊新聞や『マティション』『シンラバ・ワタナタム』などの雑誌も多数用意されている。
- 6 言語学習参考書・教科書については、タイ語の場合、比較的充実している。日本書籍出版協会の図書検索ホームページ (<http://www.books.or.jp>) による検索によれば、書名に「タイ語」が見つかる図書は59件、英語4233件、中国語788件、フランス語619件、ドイツ語472件、韓国語138件である。
- 7 2000年5月3日にinfoseekによって検索。
- 8 すべて、2000年5月3日にinfoseekによって、「大学」および「**語」という2つのキーワードによるand検索を実施した結果である。
- 9 国立大学協会ほか編『国公立大学ガイドブック（平成12年度版）』大蔵省印刷局、1999: 144
- 10 筆者が愛知大学初の専任タイ語教員として赴任した1998年当時は、学内でも「タイ語」教育の認知度は低く、「タイ語」教員という自己紹介を「体育」教員や「太鼓」教員（!?）と聞き間違えられるという悲喜劇が多く発生した。
- 11 1991年には、バンコク日本人商工会議所は、ロサンゼルス、シンガポールを抜いて世界最大の879社の会員数を誇ることになった（吉川利治「在留邦人」石井米雄監修『タイの事典』同朋社出版、1993: 133）。会員数はその後も増加を続け、現在では1160社に達しているという（桑田始編『タイ国経済概況（1998/99年版）』盤谷日本人商工会議所、1999: i）。
- 12 外務省ホームページ (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/saiyo/gaikokan.html#2>)。2000年5月3日閲覧。
- 13 第1部に参加せず第2部のみに参加した学生には、第2部終了後に配布・回収した。
- 14 タイ語を学習したくないと回答した参加者は1名であり、その理由は「難しそうだから」であった。
- 15 留学生は、選択外国語のかわりに日本語を履修する。
- 16 1999年10月8日のタイ語授業後に配布し、その場で回収した。
- 17 ただし、夜間主コースのタイ語履修者の中には、定職を持つものや主婦なども含まれており、彼らは長期間の研修への参加が困難であるため、本人の学習熱意と諸研修への参加希望は、完全には一致しない。
- 18 タイ国内で実施する野外調査実習であり、参加学生は日本国内での事前研修とあわせて4単位を取得する。1999年度は、ナレースワン大学の協力の下、ピサヌローク県において商店街形成についての調査を実施した。
- 19 現在のところ、タイ国内におけるタイ語の「語学研修」は実施されていない。この項目は、「語学研修」の実施を仮定した場合の参加希望率である。
- 20 「タイ語学習者」の中でも、大学で学習する者は学部や専攻によっても目的が異なるであろうし、語学学校等で学習する者は、個人的に受講を申し込んだ者と企業等からの派遣で受講を申し込んでいる者とは、その目的に大きな差があるであろうことが想像される。今後、精緻な調査が期待される。
- 21 履修希望未提出者3名を除く。
- 22 1999年10月12日のタイ語授業後に配布し、その場で回収した。
- 23 学生のもつ「タイ文化」のイメージが、「観光」や「旅行」への興味を通して、より具体的にはタイ

タイ語学習の対学生魅力：タイ語履修生へのアンケート調査から

への「観光」や「旅行」をテーマにしたマス・コミの影響を通して、形成されたことは、聴き取り調査の結果から推測できる。しかし、学生のもつその「タイ文化」のイメージが具体的にいったいどのようなもので、どのように形成されたものであるかについては、今回の調査の範囲を超えるものであるため明らかにはできなかった。今後の研究が必要である。